福岡教育大学紀要，第69号，第１分冊，9－18（2020）

「コブレの聖母」伝説
―ヘミングウェイが『老人と海』に込めた想い―

The Legend of the Virgin of Cobre
― Hemingway's Great Appreciation Embedded in *The Old Man and the Sea* ―

江　頭　理　江　　桑　野　健太郎

Rie EGASHIRA　　Kentaro KUWANO

福岡教育大学英語教育ユニット　　九州国際大学付属高等学校

（令和元年９月30日受付，令和元年12月12日受理）

1. はじめに

アーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway）がキューバのコヒマルを舞台として描いた小説『老人と海』（*The Old Man and the Sea*）。ヘミングウェイは1952年にこの作品を発表し，その翌年にピューリッツァー賞を，そして1954年にはノーベル文学賞を受賞した。1940年に自身も積極的に関わったスペイン内戦を舞台にした『誰がために鐘は鳴る』を発表して以来，読者の大きな評価を得ることができないでいた。サイード・ジャミル・シャーワン（Saed Jamil Shahwan）は，そのヘミングウェイの苦しみが『老人と海』のサンチャゴに表れていると分析する。"From the novel, Santiago represents the Hemingway's unconscious attitude and conflicting views for recognition and the pain associated with his perpetual failure in his work as a writer" (89). そのような苦しみを抱えながらも，キューバを舞台として執筆し，作家としての自信を取り戻したヘミングウェイにとって，この『老人と海』には特別な想いが込められているのではないか。

本稿では，まず，ヘミングウェイが生きた時代のキューバの歴史とヘミングウェイのキューバでの生活を，『老人と海』執筆の背景としてまとめていく。次に，作品中に登場するコブレの聖母というモチーフを理解するために，キューバにとって，コブレの聖母は何を意味するのかについて触れていく。そして，ヘミングウェイが苦悩を抱えながらも，作家としての自信を取り戻すことにつながったキューバを舞台とした作品『老人と海』が，キューバの人々にとって大きな役割を果たしてきた，「コブレの聖母」伝説の表象となっているのではないかと考察していく。

2. ヘミングウェイとキューバ

『データブック・オブ・ザ・ワールド2016年版』にキューバの略歴が次のように記載されている。

> 1492年コロンブスが到達。1511年スペインにより征服される。1868～1878年第１次独立戦争。1895年から第２次独立戦争。1898年米・スペイン戦争の結果，アメリカの軍政下に入る。1902年共和国として独立したが，その後もアメリカの支配が強く及んだ。1952年バチスタ独裁政権が発足。1959年カストロらによるキューバ革命が成功。1961年中南米最初の社会主義国となる。同年アメリカと断交。またアメリカ支援の部隊が武力侵攻したが撃退（ピッグズ湾事件）。1962年ソ連ミサイルの持ち込みに端を発した「キューバ危機」が発生。1976年ソ連憲法を模範とする憲法を制定。同年12月カストロが国家評議会議長に選出された。(413)

この略歴から分かるように，キューバは長らくスペインの植民地となってきた。フロンティアの特質があるにも関わらず，キューバの東の地域は，より広範囲なスペインの植民地支配が広まっていたとマリア・エレナ・ディアス（María Elena Diaz）は説明している。“Yet, regardless of its frontier character, the eastern region of Cuba was also very much part of the wider Spanish colonial world”（14）.

1899 年に生まれ，1961 年に亡くなったヘミングウェイはその 62 年の生涯の内，晩年の約 22 年間をキューバで過ごしている。そのことからも，キューバはヘミングウェイの第 2 の祖国であり，また彼が生きた時代のキューバはまさに激動の時代を送っていたと言える。

キューバに関する著名な知識人である，シロ・ビアンチ・ロス（Ciro Bianchi Ross）によると，ヘミングウェイは人生後半の 22 年間をビヒーア（望楼の意）という名の別荘（フィンカ）で過ごした。1928 年 4 月に初めてキューバを訪れて以来，怪しまれかねないほど毎年，旅行者としてキューバ訪問を繰り返していたという。ホテルでの仮住まい生活に嫌気がさした，彼の 3 番目の妻であるマーサ・ゲルホーンがビヒーアを探し出した。そしてそこで，『誰がために鐘は鳴る』『河を渡って木立のなかへ』（1950 年），『老人と海』（1952 年），『移動祝祭日』（1964 年，遺作），『海流のなかの島々』（1970 年，遺作）を執筆した。ロスは「アーネスト・ヘミングウェイのキューバでの日々は，彼の生涯のもっとも知られていない部分でもある」（22）と述べている。

ロスによると，生前，ヘミングウェイは次のように述べている。「わたしはこの国（キューバ）を愛する。まるで我が家にいるように感じるのだ。人が自分の生まれた場所以外で我が家にいるように感じるとすれば，それこそ運命づけられた場所というものだ」（7）。

さらに，「ヘミングウェイの崇拝者である」（20）ガブリエル・ガルシア・マルケスが，ヘミングウェイのキューバ滞在を次のように評しているとロスは述べる。

> ……ヘミングウェイは，当時キューバ人たちが想像していたよりはるかに，キューバ魂の奥深くに入り込んでいた……。島のあまり顧みられない場所をつまびらかにする足跡を，これほど多く残した作家もほかにいない。（7）

さらに，ハバナ生まれのキューバ第一線のジャーナリストのノルベルト・フエンテス（Norberto Fuentes）によると，フィンカ・ビヒアにおけるノーベル賞受賞の非公式の祝いの席で，ヘミングウェイは次のように語っている。

> これはキューバに与えられた賞であります。なぜなら，この作品は，わたしが一市民であるところのキューバにおいて，コヒマルの仲間たちの援助によって，発想され，創作されたものだからです。この，わたしの第二の祖国は，すべての翻訳を通して，全世界に紹介されています。そして，わたしはこのキューバに蔵書と家を持っているのです。（231）

フエンテスはさらに，ヘミングウェイが「自分はコヒマルとその住民について五百頁の物語を書くことができたろう，しかし，あえて，サンティアゴの物語に焦点を絞り，真実の老人と魚を創りだしたのだ」（231）と語ったと記している。フエンテスは，この発言に対し，「彼は，おそらく，より高度に凝縮された作品世界を生み出すために省略した，さまざまな材料のことを言っているのだろう」（231）と分析する。

ロスは「ヘミングウェイは『老人と海』の舞台となっているコヒマルの漁師たちに多くを負っていた」（58）と分析する。漁法や生粋の漁師としての職業上の知恵など現地人としての風習が作中にうかがえる。その関係性を証明するがごとく『老人と海』が出版されたとき，ヘミングウェイはコヒマルの漁師たちを自宅に招いている。ロスによると「ビヒーアの資料室には，グレゴリオ・フエンテス，エル・ソルド，カチンバ，チェオ・ロペス，アルセニオ，オバ・カルネーロ，タト，キンティンといった，コヒマルのテラーサやほかの酒場で知り合った友人たちとヘミングウェイがいっしょに写っている写真が保管されている」（58）。

これらの表記からもヘミングウェイがキューバでの生活を充実させており，現地の人々と交流を深め，活気に満ちた日々を送っていたかが理解できる。次の章では，キューバの人々にとって重要な意味を持つ，コブレの聖母についてまとめていく。

3. キューバにとってのコブレの聖母

『老人と海』の中には，サンチャゴの部屋の描写が以下のようになされている。“The shack was made of the tough bud-shields of the royal palm which are called *guano* and in it there was a bed, a table, one chair, and a place on the dirt floor to cook with charcoal” (8). この表記から，ここに描かれている場所がキューバであると明記はされていないものの，ヘミングウェイが過ごしたキューバの生活を彷彿とさせる具体的な描写を感じ取ることが出来る。貧しい生活の中でも信仰や宗教性をにおわせる表現が以下のように続く。

> On the brown walls of the flattened, overlapping leaves of the study-fibred *guano* there was a picture in colour of the Sacred Heart of Jesus and another of the Virgin of Cobre. These were relics of his wife. (8)

ここに登場する “the Virgin of Cobre” とは “Our Lady of Charity of El Cobre” や “the Virgin of Charity” とも呼ばれ，「コブレの聖母」という意味である。キューバに住む人々にとって，このコブレの聖母は大きな役割を果たしてきた。ディアスは，コブレの聖母について，以下のように詳細な説明をしている。Cobre とは「銅」のことであり，銅の露天採掘場としての歴史をもつ El Cobre の地名の由来となっている。“A large open quarry of copper mines provides the material referent for the name of the village: El Cobre (*cobre*, or copper). For better or worse, the history of El Cobre has also been connected with copper mining since its early days” (5). El Cobre は銅の採掘場として栄えたが，のちに宗教的崇拝の地として有名となっていく。“After the Crown’s confiscation of the mines, the reputation of El Cobre underwent a significant transformation from a major export mining center to a major center of religious worship in the region” (17). 実際に，1670 年代にコブレの聖母の信仰と伝統が主要な地方，地域に広まっていき，19 世紀にはキューバの伝統となっていった。“1670s, the cult and tradition of the Virgin of Charity grew to become a major local, regional, and, some two centuries later, national tradition in Cuba” (5). さらにディアスは，コブレの聖母が 20 世紀初頭よりキューバの守護者として大いに尊ばれていることを説明している。

> By the mid-eighteenth century Bishop Don Pedro Agustin Morell de Santa Cruz wrote, “The sanctuary of El Cobre is the richest, most frequented, and most devout in the Island, and the Lady of Charity the most miraculous image of all those venerated (in Cuba).” Our Lady of Charity of El Cobre would eventually become the island’s patroness in the early twentieth century and continue to be an important and plurivocal symbol in the island’s social imaginary to this day. (17)

そのほかにも，フィンカ・ビヒアの老人の発言からも，コブレの聖母がキューバの人々に大切にされていると感じ取ることが出来る。高野が 2009 年にヘミングウェイの蔵書調査のため，キューバのフィンカ・ビヒアを訪れた際に，少年時代にヘミングウェイから野球を教わったという 3 人の老人にインタビューをする機会を得ている。そのインタビューの中で老人は，以下のように “the Virgin of Cobre” に対する想いを言葉というより，態度で示している。

> フィンカ・ビヒアの玄関には存在感たっぷりの大きな木のオブジェが据え付けられており，それは魔除けの働きをしているのだそうだ。私がそのオブジェに目を向けたのに気づいた老人のひとりは，ヘミングウェイがもっとも大切にしていたのは “Caridad del Cobre” だという。通訳を介して英語で話を聞いていた私は，そのことばが “Charity of Copper” と訳されていたために，ヘミングウェイがノーベル賞のメダルを寄付したというコブレの教会のことを指しているとすぐに気づかなかった（コブレはもともと銅山として栄えた土地で，「銅」を意味することばである）。その老人はオスカル・ビリャレアルという名の画家であったのだが，私が理解していない様子を見て取って，私の持っていたメモ帳と鉛筆を取り上げ，記憶だけを頼りに瞬く間にコブレのマリア像を書き上げた。思わず「これなら昨日見てきたばかりだ」と伝えると，彼ら三人はとてもうれしそうに「そうか，行ってきたのか。それはよかった」と満面の笑みを浮かべたのだった。その笑顔を見たとき，コブレのマリアがキューバの人々にとっていかに大切さ存在であるかが強く実感できた。(12, 13)

諸説あるものの，コブレの聖母についての伝説は，次のように語られている。キューバのサンチャゴ・デ・クーバ地方の若い漁師3人が海で嵐に遭遇する。まさに彼らが溺死寸前のところでマリアが現れ，彼らを港まで導いてくれたという。

プエルトリコ・ラテン研究に取り組むスティーヴンス・アローヨ・アンソニー（Stevens-Arroyo Anthony M）はコブレの聖母にまつわる話を以下のようにまとめている。

> The original statue was discovered in 1613 by two Taíno, Rodrigo and Diego Hoyos who took the boy Juan Moreno, then a black slave of 10 years old in a canoe into the waters of the Bay of Nipe on the north coast to seek salt to be used in preserving meat that the Indians supplied to the new copper mine on the southern side of the island. A statue was seen floating on a box, or base, and was taken by the man to Barajagua, a small settlement between the Cauto River and the Hacienda Tacamara. No more than 80 Christianized Taíno and some free Africans lived there under a Spanish foreman, Miguel Galán. The image was placed on a platform in one of the Taíno *bohios*, or huts. (47)

バチカン放送局は，2012年にコブレの聖母の発見から400年経過したことを祝うために，教皇がミサを行ったことを報道している。その放送内容の中で，コブレの聖母についての歴史が，次のように語られた。

> コブレの慈悲の聖母の歴史は，今からおよそ400年前，3人の漁師（2人の先住民と1人の黒人奴隷）がニペ湾で「わたしは慈悲の聖母」と書かれた木製の聖母像を発見したことから始まる。
>
> 聖母像はその後，エル・コブレの銅山に運ばれ，1684年，最初の巡礼聖堂が建てられた。この聖堂は，19世紀には奴隷解放とキューバ独立を目指す人々の精神的支えとなっていった。1898年，キューバ解放の感謝のミサがここで捧げられた。1916年に教皇ベネディクト15世はコブレの慈悲の聖母をキューバの保護者として宣言した。（バチカン放送局）

諸説あるものの，伝説として残された話と現代の推察はほぼ一致しており，キューバの人々にとって，コブレの聖母がどれほど信仰や宗教における重要な役割を果たしてきたかが理解できる。

次の章では，ヘミングウェイが『老人と海』を執筆する際に，この「コブレの聖母」伝説をモチーフとしたのではないかという視点で考察していく。

以下，年表にトーマス・ツイード（Thomas A Tweed）によってまとめられた，コブレの聖母を中心としたキューバの歴史を記す。

Table: Chronology of Cuba

1492	Columbus lands on the island of Cuba.
1562	The first miracle is reported at the chapel of Our Lady of Charity in a hospital in illescas, Spain.
1611-12	The miraculous discovery of Our Lady of Charity off the Cuban coast by an African boy, Juan Moreno, and two Indian brothers, Rodrigo de Hoyos and Juan de Hoyos. Statue taken to Barajagua.
1613	Image of Our Lady of Charity moved to El Cobre, probably first in the chapel of the hospital adjoining the shrine.
1648	By this time, Our Lady of Charity is venerated on the main altar in the reconstructed shrine in El Cobre.
1670s	Toward the end of this decade a new shrine to Our Lady of Charity is erected in El Cobre.
1683	Father Onofre de Fonseca begins his duties as the first director of the shrine of Our Lady of Charity in El Cobre.
1687	In sworn testimony, Juan Moreno describes his discovery of Our Lady of Charity seventy-five years earlier.
1703	Father Onofre de Fonseca writes “The History of the Miraculous Apparition of Our Lady of Charity of Cobre.” (It will be published much later, in 1830.)
1788	Felix Varela, influential Catholic priest and precursor of the independence movement, is born in Havana.

1868	The Ten Years War (1868-78), the start of the armed struggle for independence from Spain, begins in Cuba.
1886	Spain abolishes slavery.
1895	War of independence (1895-98) begins in Cuba, and many appeal to Our Lady of Charity for protection.
1896	The city of Miami is incorporated.
1898	The Cuban-Spanish-American War leads to U.S. occupation.
1902	The Cuban Republic is established and U.S. occupation ends.
1915	Veterans of the War for Independence hold a reunion in El Cobre and decide to petition the pope to name Our Lady of Charity the patroness of the new Cuban Republic.
1916	On 16 May Pope Benedict XV grants the veterans' petition, establishing Our Lady of Charity as Cuba's patroness.
1927	The most recent shrine to Our Lady of Charity in Cobre is consecrated on her feast day, 8 September.
1951-52	Leaving Cobre on 20 May, the Virgin starts a fifteen-month national pilgrimage around the island to celebrate the fiftieth anniversary of Cuban Republic.
1954	A survey finds that Cuba has the lowest proportion of nominal and practicing Catholics in Latin America.
1958	The Diocese of Miami is established, with Coleman Francis Carroll appointed as bishop.

4.「コブレの聖母」伝説 ―― ヘミングウェイが『老人と海』に込めた想い ――

4.1 文学作品中のシンボル

カルロス・ベイカー（Carlos Baker）は，『老人と海』に込められたシンボルに関して次のように述べている。バーナード・ベレンソンは称賛の言葉を並べた手紙をヘミングウェイに送っている。その手紙の返信として，ヘミングウェイは『老人と海』の秘密を「海は海であり，老人は老人であり，少年は少年であり，マカジキはマカジキであり，サメはサメであり，シンボルは何もない」と明かしている。

> Bernard Berenson earned his gratitude with a letter of praise. Ernest and Mary both wrote to thank the old man. The secret about the novel, Ernest explained, was that there wasn't any symbolism. Sea equaled sea, old man was old man, the boy was a boy, the marlin was itself, and the sharks were no better and no worse than other sharks. (770)

しかし作家は，ときに意識的に，またときに無意識のうちに，作品の中にシンボルを埋め込み，その作者だからこその視点で物語を描いていくものである。往々にして読者は，その作家の独自性にひかれていく。現に，ハバナ紙は，隠されたシンボルをかなり強調している『老人と海』を論評したと，ベイカーは述べる。"A Havana paper reviewed *The Old Man and the Sea* with much emphasis on the hidden symbolism" (771).

スリランカでヘミングウェイについて研究しているサンダマリ（K. P. S. Sandamali）は，シンボルに関して次のように述べている。シンボルとは言葉の中に表れる形象であり，文学作品においては，言葉が直接示すもの以上の何かを表していることが多い。熟達した作家たちは，文学的技巧であるそのシンボルを用いて，作中にその才能を散りばめている。ヘミングウェイはシンボルを使用することに精通しており，小説のテーマを展開するために，『老人と海』の作品中に，たくさんのシンボルを用いている。"Ernest Hemingway is signified for his mastery of using symbols. . . . In *(The) (O)ld Man and the (S)ea*, the author uses (a) number of symbols respectively to develop the themes of the novel" (125). さらに，サンダマリは，読者は作中に描かれたシンボルを解読していくことで，作家が作品に込めた本当の想いを理解することができると主張する。"The objective of this work is to explore the symbols used in the novel to decode these symbols and identify the various interpretations that they stand for" (125).

イギリスの数学者であり，哲学者であるアルフレッド・ノース・ホワイトヘッド（Alfred North Whitehead）は，シンボルは直接経験することによって得られた知識と異なり，誤りやすい性質を有していると指摘している。

> There is one great difference between symbolism and direct knowledge. Direct experience is infallible. What you have experienced, you have experienced. But symbolism is very fallible, in the sense that it may induce actions, feelings, emotions, and beliefs about things which are mere notions without that exemplification in the world which the symbolism leads us to presuppose. (Chapter 1. 4)

4.2『老人と海』に登場するシンボルに関する先行研究

『老人と海』に関しては，これまでに様々な分析が行われ，作中のシンボルが何を表しているかについても，複数の解釈が存在する。サンダマリは次のように分析している。サンチャゴはイエス・キリストを表しており，人生において敗北を受け入れたくない人間の性質を表象している。"In *(The) (O)ld Man and the (S)ea*, Santiago symbolizes the Jesus Christ and the nature of human beings who don't like to accept the defeat in their lives" (127). さらにマノーリンは若かりしサンチャゴを表しており，イエスの弟子の表象であると分析する。"In *The (O)ld (M)an and the (S)ea*, Manolin symbolizes the youth of Santiago and the disciples of Jesus" (127). サンチャゴの夢の中に何度も登場するライオンは，彼の失われた若さと力の衰えを表象していると分析する。"The lions in Santiago's dreams represented his lost youth and his decreasing strength" (128). そして，作中の最後に船から取り外し，引きずりながらも家に運んだマストは，イエス・キリストが引きずらなければならなかった十字架を表しており，サンチャゴをキリストのように表象したかったのではないかと分析する。"Here the mast symbolizes the cross that Jesus Christ was forced to drag. The desire of the author to represent Santiago as Christ like figure . . ." (127).

リボン・アリとナズムル・ハク（Ripon Ali & Nazmul Haque）は，サンダマリとは別の視点で，次のように考察している。キューバの貧しい社会・経済的状況が，『老人と海』の大きな論点となっている。連続する精神的，肉体的困難を経験し，現代的な道具を購入する余裕がないため，伝統的な釣り具を使って漁を行うサンチャゴを通して，その貧しさが描かれていると分析している。

> . . . poor socio-economic conditions of an economically deprived Cuban society are the most burning questions in Hemingway's *The Old Man and the Sea* and it is picturesquely delineated through Santiago who undergoes a series of mental and physical hardships only because of his poor socio-economic condition. . . . Santiago continues fishing not only drinking the cup of sorrow but also using the traditional methods because of not having enough money to buy modern fishing tools. (95)

さらにサンチャゴの生活のみならず，マノーリンの両親が彼に漁という労働を行わせ，マノーリン自身も教育や学校ではなく，漁に興味関心を抱いている姿に，キューバの貧しい社会・経済的状況を映し出していると分析する。

> In the poverty-stricken Cuban society, even parents used to force their children to join various workforces to add some money to their poor income. Manolin should have respect and affection for education and school but he shows interest in fishing activities because of the cruel clutches of poor socio-economic conditions of the then Cuban society. (100)

本論文ではこれらの解釈を先行研究として考慮しながらも，キューバで宗教的役割を果たしてきた「コブレの聖母」伝説をモチーフにしているのではないかという視点で考察していく。ホワイトヘッドが述べている通り（Chapter 1. 4），『老人と海』が「コブレの聖母」伝説をモチーフとしているとする解釈が，確実に真実であるとは言えないかもしれない。しかし，シンボルを探求するということは誤りが許されるということでもあるため，1つの仮説となりうるのではないだろうか。

4.3『老人と海』とコブレの聖母伝説

『老人と海』の中で，サンチャゴが信仰・宗教に関する独り言を述べるシーンがある。例えば，サンチャゴは大魚マカジキとの闘いの中で負った左手の引きつりが治りつつも，痛みを抱えながら大魚と闘う2日目の午前中に次のように独り言を述べている。"'I am not religious,' he said. 'But I will say ten Our Fathers

and ten Hail Marys that I should catch this fish, and I promise to make a pilgrimage to the Virgin de Cobre if I catch him. That is a promise' " (48). これからマカジキとの死闘が佳境を迎えるこの場面で，ヘミングウェイはモチーフとして，コブレの聖母を作中に登場させている。老人は「この闘いに勝利した暁には，コブレの聖母に祈りを捧げに行く」と述べている。この言葉こそが，ヘミングウェイが「コブレの聖母」伝説を基に，『老人と海』を書き上げたことを示唆しているのではないか。つまり，『老人と海』は「コブレの聖母」伝説の表象ではないか。そのことを証明するために，以下の３つの視点で論を進めていく。

① サンチャゴの家と伝説に登場するコブレの聖母が祀られている場所
② サンチャゴとヘミングウェイの関係性
③ サンチャゴ，マノーリン，ライオンと伝説に登場する３人の漁師およびマカジキとの死闘とコブレの聖母の関係性

4.4 サンチャゴの家と伝説に登場するコブレの聖母が祀られている場所

『老人と海』に出てくるサンチャゴの家は粗末な小屋である。"They walked up the road together to the old man's shack and went in through its open door. . . . The mast was nearly as long as the one room of the shack" (8). 常に開けっ放しになっているドアからも泥棒すら入る価値もなく，たった一部屋しかない小屋であることが読める。また地理的に小高い丘の上にあることがマカジキとの死闘の末帰港し，疲労困憊のサンチャゴが自身の小屋に戻ろうとする以下の描写からもうかがえる。"He started to climb again and at the top he fell and lay for some time with the mast across his shoulder. . . . He had to sit down five times before he reached his shack" (94).

一方，「コブレの聖母」伝説において，３章で触れた通り，コブレの聖母が祀られた場所もまた小高い丘の上である。コブレの聖母は，今でこそ観光客がたくさん訪れる立派な教会に祀られているが，1613 年に発見された当時はコブレ銅山にあるタイノー族の掘っ建て小屋に祀られていた。

これらの事実からも，サンチャゴの家は伝説に登場するコブレの聖母が祀られている場所を象徴していると言えるのではないか。そしてこの象徴が『老人と海』が「コブレの聖母」伝説を表象していることの証明の序章となる。

4.5 サンチャゴとヘミングウェイの関係性

ヘミングウェイは作家として苦悩していた自分自身をサンチャゴに重ねて描いているのではないだろうか。ヘミングウェイは『誰が為に鐘は鳴る』を 1940 年に発表した。この作品は，後に映画化されるなど，世界中で大ヒットとなった。また彼は，同 1940 年にポーリンと離婚し，作家マーサ・ゲルホーンと結婚し，キューバのハバナ近郊に転居することとなった。それ以降，納得のいく作品を創作することが出来ず，『老人と海』を出版するまでの間，作家として苦しんでいた。まさに『老人と海』に向き合っている時期のヘミングウェイは過去の栄光と名誉を抱えながらも，人生という大きな海で遭難していたと言えるのではないだろうか。

『老人と海』に出てくるサンチャゴもこの時期のヘミングウェイと同様の境遇にあり，人生に苦しんでいることが，次の描写より伝わってくる。"The old man had seen many great fish. He had seen many that weighed more than a thousand pounds and he had caught two of that size in his life, but never alone" (47). この描写は老人がかつて 1,000 ポンド以上もの魚を２度も釣り上げたことを示している。しかし，次の描写から今は１匹も魚が釣れない日が 84 日も続き，サラオ（すっかり運に見放された）の状況だと言われ，さらにはテラス（酒場）で他の漁師からからわかれる姿が描かれている。

> . . . he had gone eighty-four days now without taking a fish. In the first forty days a boy had been with him. But after forty days without a fish the boy's parents had told him that the old man was now definitely and finally *salao*, which is the worst form of unlucky, . . . (3)

> They sat on the Terrace and many of the fishermen made fun of the old man and he was not angry. Others, of the older fishermen, looked at him and were sad. But they did not show it and they

> spoke politely about the current and the depths they had drifted their lines at and the steady good weather of what they had seen. (4, 5)

年配の漁師たちは，サンチャゴの若かりし頃を思ってか，現在の姿を悲しむものもいると描写されている。サンチャゴ自身も人生という大きな海で遭難していると言える。

これらの事実からサンチャゴという人物に，1940年代のヘミングウェイ自身の苦しみが重ねられているように感じられてならない。そして，ヘミングウェイがサンチャゴに自身の境遇を重ねていると仮定することは『老人と海』が「コブレの聖母」伝説を表象していることの仮説に繋がっていく。

4.6 サンチャゴ，マノーリン，ライオンと伝説に登場する3人の漁師およびマカジキとの死闘とコブレの聖母の関係性

『老人と海』が「コブレの聖母」伝説の表象であるのならば，2つの関係を証明する必要がある。1つ目は，3人の漁師が表すもので，2つ目はコブレの聖母が表すものである。

「コブレの聖母」伝説に登場する3人の漁師とは，『老人と海』に登場するサンチャゴ，マノーリン，ライオンではないだろうか。サンチャゴとマノーリンが漁師であることは次の描写からも明白である。“Can I offer you a beer on the Terrace and then we'll take the stuff home. ‘Why not?’ the old man said. ‘Between fishermen’” (4).「コブレの聖母」伝説に登場する2人の漁師のうち，おそらく先住民の漁師2人に当たるであろう。それでは，もう1人の黒人の漁師は誰なのか。それをひも解く鍵は「ライオン」の夢である。間﨑は次のように分析する。

> 老人と少年とライオン。この三者は老人の言いかたをかりれば，「本当の兄弟」である。老人は夢のなかでは少年であった。少年である老人は，ライオンがまるで兄弟のように戯れているのをみていた。老人は，ライオンを，少年と同じように愛した。つまり，ライオンは少年であった。－船の上で夢みたライオンは，まるで，家族のようだ。老人は，夢のなかで，船の上から，黄色い砂浜に現れたライオンたちをみている。－小説の悼尾を飾るこの場面は，少年と老人とライオンが三位一体であることを語って余すところがない。(60)

この分析からも，マカジキとの闘いの中に時折登場し，サンチャゴを鼓舞するこのライオンこそが3人目の漁師であると推測することが出来る。しかもこのライオンは黒人の漁師を象徴していることが次の描写からも想像できる。

> He was asleep in a short time and he dreamed of Africa when he was a boy and the long, golden beaches and the white beaches, so white they hurt your eyes, and the high capes and the great brown mountains. . . . He only dreamed of places now and of the lions on the beach. (15, 16)

あえて「アフリカの」ライオンと描写することで，このライオンこそが3章で触れた通り，「コブレの聖母」伝説の黒人の漁師であることを示唆しているのではないだろうか。そして，これでサンチャゴ，マノーリン，ライオンと伝説に登場する3人の漁師の関係性に対する1つの可能性が見出された。

次に，伝説に登場するコブレの聖母の象徴をひも解いていく。『老人と海』の中で精神的に結ばれた3人の漁師，サンチャゴ，マノーリン，ライオンが海で出会ったのは，マカジキである。そしてこのマカジキこそが，「コブレの聖母」伝説に登場する，海で溺死寸前だった3人の漁師が遭遇した聖母像ではないだろうか。その証拠が作中に散りばめられていると推測する。マカジキとの死闘に勝利したサンチャゴは，それを家に持ち帰ろうとする。その帰路でマカジキはサメたちに食べつくされるのだが，大魚との闘いに勝利したという事実そのものが大切であり，その想いを持ち帰ることがサンチャゴにとっても，またヘミングウェイ自身にとっても精神的な救いとなる。そのサメと戦いながらマカジキを持ち帰る場面で，マカジキとコブレの聖母の関係性を匂わせる描写がある。“The old man could hardly breathe now and he felt a strange taste in his mouth. It was coppery and sweet and he was afraid of it for a moment” (92). ここで唐突に，しかし自然に “coppery” という言葉を用いて，老人の疲労困憊ぶりを表現している。コブレ（Cobre）とは

銅（Copper）を意味しており，マカジキとコブレの聖母の関係性を表しているのではないか。

さらにマカジキとの闘いに勝利したサンチャゴ（精神的なコブレの聖母の表象）は自身の家，すなわち本章４項で説明したコブレの聖母が祀られている場所に真っ先に向かっていく。何よりもベッドで休みたいという描写が一層，その関係性を強めていく。“The wind is our friend, anyway, he thought. Then he added, sometimes. And the great sea with our friends and our enemies. And bed, he thought. Bed will be a great thing”（93）. ここで重要となってくるのが，地面ではなくベッドで休むという行為である。ベッドは地面よりも一段高く作られている。いわゆる Platform である。「コブレの聖母」伝説で持ち帰られた聖母が祀られたのも，掘っ建て小屋の一段高く作られた場所（Platform）である。そしてマカジキとの勝利とコブレの聖母の関係性を伺わせるのは最後の描写である。“Up the road, in his shack, the old man was sleeping again. He was still sleeping on his face and the boy was sitting by him watching him. The old man was dreaming about the lions”（99）. 老人の生死が分からないまま物語は終わるのだが，ベッドで寝たまま物語を終えるという描写から，マカジキとの闘いで取り戻した自信，つまりコブレのマリアの表象が，教会に安置されたことを意味するとも受け取れる。このような観点で『老人と海』を見ると，コブレの聖母がコブレ銅山の小屋に祀られたという伝説に一致し，まさにこのマカジキとの死闘に勝利することがコブレの聖母を表象していると言えるのではないだろうか。

以上の３つの視点で『老人と海』を読むと，『老人と海』が「コブレの聖母」伝説の表象であると推察することが出来る。そして，『老人と海』が「コブレの聖母」伝説の表象であると仮定することで，次のことが考えられる。ヘミングウェイ自身が作家としての自信を取り戻す１つのきっかけとなったキューバでの生活に，最大限の感謝の意を捧げるために，『老人と海』の作品中に，キューバの人々が大切とする「コブレの聖母」伝説をモチーフとして，登場させたのではないだろうか。「コブレの聖母」伝説によると，海で瀕死状態であった３人の漁師たちは，岸に上がって，自分たちが必死につかまっていた木片をよくよく見てみると，木で彫られた聖母像であったことに気づいたそうだ。そして自分たちの命を救ってくれたその聖母像を大切に祀ったとされる。このことをヘミングウェイに当てはめて考えると次のようなことが考えられる。『誰が為に鐘は鳴る』を執筆して以来，高い評価を得ることが出来ず，苦しみながら執筆活動を行っていたヘミングウェイは，作家人生という海で溺死寸前のところで，キューバという一種の救いにつかまり，必死に岸に戻ろうと執筆活動を行っていた。そして，『老人と海』を書き上げることで，自分自身が人生という海で遭難しながらも，必死につかんでいたものをよくよく見てみると，キューバでの充実した日々であったと理解したのではないか。そして，ノーベル文学賞受賞後に，メダルをコブレの聖母が祀られている教会に寄贈することで，自らの手で『老人と海』に込めたモチーフを用いて作品を完成させ，キューバの人々への感謝の想いを表明したのではないだろうか。

5. 終わりに

ロスによると，ヘミングウェイは『老人と海』を書き終えたときに，次のように述べている。「ついに生涯をかけて追及してきたものに形を与えることができたかのようだ。」（55）そして，こうも述べている。

> リアルな老人，リアルな少年，リアルな海，リアルな魚，リアルな鮫を，わたしは描こうと試みた。しかし，もしそれに成功し，十分リアルに描けていれば，それらは多くのことを意味しうる……。ひとつの物事をきちんと誠意をもって描けば描くほど，のちに別の多くのことを意味するのだ……。（55）

２章で触れたように，ロスは「アーネスト・ヘミングウェイのキューバでの日々は，彼の生涯のもっとも知られていない部分でもある」（22）と述べている。そのヘミングウェイのもっとも知られていないキューバでの生活を基に，『老人と海』を読み解くことは大変有意義であった。

ベイカーによると，フォークナーは『老人と海』に関する短い書評を *Shenandoah* という雑誌に投稿し，この小説こそが，ヘミングウェイの小説の中で最高傑作であると述べている。

> Faulkner, who presently sent in a short review of *The Old Man and the Sea* to the little magazine *Shenandoah*. He called the novel Hemingway's best. ‘Time may show it to be the best single piece of us,’ he wrote, ‘I mean his and my contemporaries. This time, he discovered God, a creator. Until

now, his men and women had made themselves, shaped themselves out of their own clay; their victories and defeats were at the hands of each other, just to prove to themselves or one another how tough they could be, . . .' (767, 768)

4章で触れたように，ヘミングウェイは自分自身を『老人と海』のサンチャゴに重ね，「コブレの聖母」伝説をモチーフに作品を完結させることで，自信を取り戻すことが出来たのではないか。長年，自分の納得いく作品が書けない間，キューバで生活することで新たな価値観を得て，過去の栄光に打ち勝ち，まさに人間として，作家として復活することが出来たのではないだろうか。その最大限の感謝の意を表すために，そして小説の舞台となったコヒマルの人々に捧げるために，ノーベル文学賞で手にしたメダルをコブレの聖母が祀られている教会に寄贈したのであろう。

キューバの人々はヘミングウェイを英雄のように扱っている。1961年7月2日にヘミングウェイがアイダホ州ケチュムで自殺したのを知ったとき，キューバの人々は集会を開き，海に面した公園に作家の胸像を建てることを決めた。しかし，材料となるブロンズがなかったため，漁師たちは船のスクリューを集めて彫刻家に渡したのだそうだ。そこまでしてヘミングウェイに敬意を表したのは，キューバの人々が大切にしている，「コブレの聖母」伝説を，『老人と海』という世界中で大ヒットとなった小説を通して，世に示したからなのかもしれない。キューバの人々を長年，信仰と宗教の面で支え続けているコブレの聖母をヘミングウェイが題材として取り上げたことに感謝の意を表しながら。ならば，コブレのマリアと同じくらい大切なヘミングウェイという海の英雄をこれからもキューバの人々は讃えていくことであろう。

参考引用文献

Ali, Md Ripon, and Haque, Md Nazmul. "Exploration of the Influence of Poor Socio-economic Conditions on Santiago and Manolin in an Economically Deprived Cuban Society in *The Old Man and the Sea*." *European Journal of Literature, Language and Linguistics Studies*, vol. 2, issue 4, 2018, oapub.org/lit/index.php/EJLLL/article/view/4.

Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life (Pelican Biographies)*. Pelican Books Ltd, 1972.

Díaz, María Elena. *The Virgin, the King, and the Royal Slaves of El Cobre: Negotiating Freedom in Colonial Cuba, 1670-1780*. Stanford UP, 2002.

Hemingway, Ernest. *The Old Man and the Sea*. Arrow; New ED edition, 2004.

Sandamali, K. P. S. "Symbolism in Ernest Hemingway's *The Old Man and the Sea*." *International Journal of Scientific and Technology Research*, vol. 4, issue 12, 2015, pp. 125-129.

Shahwan, Saed Jamil. "A Lacanian Study of Hemingway's *The Old Man and the Sea*." *Mediterranean Journal of Social Sciences*, vol. 10, issue 1, 2019, p. 87-91.

Stevens-Arroyo, Anthony M. "The Contribution of Catholic Orthodoxy to Caribbean Syncretism: The Case of la Virgen de la Caridad del Cobre in Cuba." *Archives de Sciences Sociales des Religions* [Online], 2002, pp. 37-58. assr.revues.org/2477.

Tweed, Thomas A. *Our Lady of the Exile: Diasporic Religion at a Cuban Catholic Shrine in Miami*. Oxford UP on Demand, 1997.

Whitehead, Alfred North. *Symbolism, Its Meaning and Effect*. Fordham UP; Revised ed., 1985.

シロ・ビアンチ・ロス著，『キューバのヘミングウェイ』，後藤雄介訳，海風書房，1999年。

高野泰志，『アーネスト・ヘミングウェイ，神との対話』，松籟社，2015年。

二宮健司，『データブック・オブ・ザ・ワールド2016年版』，二宮書店，2016年。

ノルベルト・フエンテス著，『ヘミングウェイ　キューバの日々』，宮下嶺夫訳，晶文社，1988年。

「教皇，サンティアゴ・デ・クーバでミサ，コブレの聖母発見400年を記念し」，2012年3月27日，『バチカン放送局』，www.archivioradiovaticana.va/storico/2012/03/27/教皇，サンティアゴ・デ・クーバでミサ，コブレの聖母発見%EF%BC%94%EF%BC%90%EF%BC%90年を記念し/gia-575174。

間崎理人，「少年とライオン―『老人と海』論」，『高岡法科大学紀要』，第3号，1992年，33-64頁。